

目次

ドクター・ホフマンのサナトリウム
〜カフカ第4の長編〜

カフカズ・ディック 221

あとがき 373

引用参考文献 378

上演記録 379

ドクター・ホフマンのサナトリウム
↳カフカ第4の長編
↳

主要登場人物

| | | |
|-------------------|--|--|
| カーヤ | | |
| ラバン | | |
| ガザ | | |
| 乗客1 | | |
| 乗客2 | | |
| 乗客3 | | |
| 乗客4 | | |
| 乗客5 | | |
| 乗客6 | | |
| 車掌 | | |
| 兵士A (バルナバス大尉) | | |
| 兵士B (クラム中尉) | | |
| オルガ (レニの母) | | |
| レニ (列車の中の妊婦) | | |
| マルベリ (ラバンとガザの母) | | |
| アマリア (小間使い) | | |
| ピアンタ (食堂の女主人) | | |
| ムスカル (墓にいる男) | | |
| フランツ・カフカ | | |
| ドーラ | | |
| ホフマン | | |
| 看護婦 | | |
| 別の看護婦 | | |
| 男1 (プロッホ) | | |
| 男2 (プロッホの友人) | | |
| 女1 (フリーダ・プロッホの妹) | | |
| 女2 (フリーダとプロッホの祖母) | | |
| 少女 (ユーリエ) | | |
| 女3 (ユーリエの母) | | |
| 男3 (ユーリエの父) | | |
| 男4 (カバンを届けに来た男) | | |
| 編集者A | | |
| 編集者B | | |
| 編集者C | | |
| 編集者D | | |
| 社長 | | |
| 社長の秘書 | | |
| 別の兵士 (トルソー中尉) | | |
| 太った退役軍人 | | |
| 門衛主任 | | |
| タイピスト | | |
| 軍人 | | |
| 司令官 | | |
| 処刑人 | | |
| 兵士 | | |
| マグダレーナ | | |
| グレーナ | | |
| インドラ | | |
| 救急隊員 | | |
| 葬儀屋 | | |
| 郵便配達 | | |
| 礼拝者 | | |

芝居は、フランツ・カフカが遺したとされる未発表原稿における小説の中の世界（A）と、その小説の原稿を巡ったり巡らなかつたりの、外の世界（B）を交互に見せる。二つの世界の基調となるトーンを乱暴に言うなら、Aはシリアス、Bはコミカルということになるが、やがて境界線は曖昧になり、最終的には混在することになるだろう。

■所…

小説の中は、特定できぬ国のどこか。
小説の外は、チエコらしき国のどこか。

■時…

小説の中は、特定できぬ時代。
小説の外は、現代（二〇一九年）及び一九二三年。

■空間…

舞台上はどこにでもなる。
大小幾多の階段が床面、頭上、舞台奥等に存在し、実際に上り下り（登退場）が可能な階段もあれば、そうでない階段もある。

椅子、机、柱、電気スタンド、ドア、本棚、その他の小道具は原則として、シーンとシーンの合間、あるいは先行してシーンが始まったあとに、ダンサー、俳優によって移

動される。

舞台後方には奥行きを三割ほどを占める、何層もの階段で構成されるいびつな山があり、この山は必要に応じてフォルムを変える。また、いくつかに分断され、移動することもある。演奏者や、進行中のシーンに登場していない人物が、この山のそこかしこに散在していることも、多々ある。この山の前面には幕が昇降し、舞台のエリアを前三分の二ほどに限定する。この幕はスクリーンとしても機能し、舞台前方から投影される映像を映し出す。

客電の落ちゆく中、楽隊による演奏が聞こえ始め、幕には次のような字幕が浮かぶ。

『フランツ・カフカは「城」「審判」「変身」等、謎めいた小説を書き続け、

『一九二四年、四一歳の誕生日を目前にして他界した。』

『その作品のほとんどは彼の死後に発表されたものであり』

『生前、労働者災害保険局の局員だった彼を作家とみなした人間は、ごくごく少数だった。』

『ある地点からは、もはや立ち帰ることはできない。その地点まで到達しなければならぬ——フランツ・カフカ』

楽隊の演奏と激しい走行音の中、出演者たちが舞台に現れ、列車の乗客席が上来上がる。
(上来上がった乗客席は、流れの中でフォルムをいくつか変容させる)

向かい合って座っているのはカーヤとラバン。ラバンはどここの国のものかわからない軍服を着ている。他にも、着席している乗客、立っている乗客が、合わせて十三、四名は

おり、車体の揺れに合わせて揺れている。窓の外を景色が激しく流れている。

と、不意に演奏がやみ、照明がカーヤとラバンを照らす。カーヤは眠っているようだ。同時に、列車の走行音も窓の外を流れる景色も、穏やかなトーンになっている。

ラバン、カーヤの寝顔を愛おしむように眺め、彼女が膝にかけていたストールがずれ落ちそうになっているのを直してやる。と、カーヤが小さな呻き声と共に目を覚ました。

……。

起きたかい？

カーヤ
今どこなの？

ラバン
まだヴェストヴェスト。この列車君が眠ってる間ずっと停まってたんだ。疲れた鹿が線路に横たわってて。やっと動き出したところだよ。

カーヤ
鹿……!?

ラバン
疲れた鹿が線路に。

カーヤ
(蒼褪めて)でどうしたの!? 轢いたの?

ラバン
まさか。なだめてどかしたよ。

カーヤ
(安堵して)よかった……。

ラバン
車掌も運転士も小さい頃から誰かをなだめるのが不得手な人間だったんだな。仕方がないから僕がなだめに行った。

カーヤ
ラバンが？

ラバン　すぐにどいてくれたよ。疲れた鹿は疲れていただけなんだ。

カーヤ　そうなの……大変だったのね……。

ラバン　いいやちつとも。

カーヤ　ごめんなさい。そうとも知らずに。

ラバン　いいんだよ……。うなされてた……？

カーヤ　……嫌な夢をみたの。あたしたちがまだ学校に通ってた頃の夢……。

ラバン　どんな夢？

カーヤ　聞いたってつまらないわよ……。

ラバン　そんなことないよ。どんな夢？

カーヤ　……じゃあ話すけど……夢ですからね。気にしないでね。

ラバン　え……？

カーヤ　不幸の始まりはヴィツエックの回した独楽こまよ……学校の門に入るなり、ヴィツエック

はその日お父さんに買ってもらったばかりだっていう緑色の独楽を回し始めたの……

同級生たちは男子も女子もみんなあつという間に夢中よ……。ラバン、あなただって

(少し笑って)　ヴィツエックか……元気かな。卒業してすぐ家族で引越して、南の方

でお父さんが新しい商売を始めたらしいけど、あいつも手伝ってるのかな。冷えてき

たな……寒くない？

カーヤ　あたしは大丈夫。ありがとう。ラバンこそ。

ラバン　僕は平気さ。それで？

カーヤ

(話を戻し)でね、あたしは独楽なんかどうでもよかったから、早く体育館へ行きたくてあなたのことを見たの……でもあなたはあたしのことなんか知らんぷりで、くい入るように独楽を見つめてるのよ……。 (と、拗^ずねるような咎^{とが}めるような目でラバンを見る)

ラバン

夢はね。

カーヤ

門の中にはあつという間に人だかりができたわ……独楽はブンブン唸^{うな}りながらすごい勢いで回り続けているの……。

ラバン

(周囲を眺め回して)汽車の音がそんな夢をみさせたのかな……。

カーヤ

生徒だけじゃなくて先生たちまで来て……「独楽だ独楽だ」って……。ブルト先生なんかなんのつもりか笛を吹きながらやってきたのよ。

ラバン

ブルト……。

カーヤ

物理の。ブルト先生。

ラバン

ああ……つい最近亡くなったんだってね。母さんからの手紙に書いてあったよ……。

カーヤ

そう……お気の毒に……。

ラバン

なんかひどい事故で。苦しんだらしいよ。どんな風にひどくてどんな風に苦しんだのか聞いても、母さん教えてくれないんだ、「おまえはまだ子供だから」って言って。徴兵検査に受かった日には「おまえももう大人なんだね」って小踊りしたクセに……。

カーヤ

……。

ラバン

(ふと)お腹すかない？

カーヤ んんすかないわ。

ラバン あと二十分もすれば次の駅に着くだろうから、サンドイッチでも買って食べようか。
カーヤ いいわよそんな贅沢ぜいたく。

ラバン いいじゃないかサンドイッチぐらい。初めての旅行だぞ。

カーヤ そうね……。

ラバン そうだよ。(当然のように)結婚したらさあ、

カーヤ (不意を突かれて) え……？

ラバン 結婚したらさ、

誰が？

ラバン (何を言い出すのかとばかりに) 僕達だよ。

カーヤ ああ……。 (嬉しい)

ラバン 結婚したら三年か、できれば二年に一度は旅行に行きたいね。できるだけ遠い所へ。

カーヤ (思わず敬語になつて) はい……。

ラバン 行こう、ふたりで。あるいは三人か、四人か五人かで。

カーヤ それは……子供のことを言ってる？

ラバン (当然のように) そうだよ。

カーヤ あたしと、ラバンの……。

ラバン もちろん。

カーヤ ……。

ラバン　　そうか、犬も飼いたいって言ってたね。

カーヤ　　(うなずいて) 飼いたい…………。

ラバン　　飼おう。

ラバン、カーヤの手をとると、その甲にやさしくキスをする。

カーヤ　　…………。(とても嬉しい)

ラバン　　(ややあつて、微笑^{ほほえ}んだまま) 弟と花を摘みに行ったんだって？

カーヤ　　(ギョツとして) え…………？

ラバン　　ガザと。森のはずれの木こりの家の裏手に。あいつからの手紙に書いてあったよ。

カーヤ　　行っていないわ、ガザと森のはずれの木こりの家の裏手になんか。

ラバン　　そう…………でも花を摘みには行ったんだろ？

カーヤ　　行っていないわよ。

ラバン　　おかしいな…………手紙にはそう書いてあったんだけど…………。

カーヤ　　どうしてそんな嘘を書くんだろ…………。

ラバン　　いいんだよ。あいつとは仲良くしてやってほしいんだ。あいつには母さんもつらくあたるだろ。友達もみんな兵隊にとられて、とうとう兄貴の僕もいなくなつて、きつとさみしいと思うんだ。誰か話し相手になつてくれる人がいないとさ。

カーヤ　　そりやたまに話ぐらいはするけど…………話しかけられればね。

ラバン　いい奴やつだろ。少し変わってるけど。

カーヤ　（消極的に）うん……。

ラバン　え、「うん」って言うのは？「いい奴だろ」にかかっているの？「少し変わってるけど」

にかかっているの？

カーヤ　（その執拗しつようさに困惑しながら）両方。

ラバン　うん。

カーヤ　うん……。

ラバン　もし何か困ったことがあった時にはいつでも家うちに相談に来るんだよ。僕はいないけど、

母さんかガザが親身しんしんになって聞いてくれるから。

うん、ありがとう。

夜中でも明け方でも、気を遣う必要なんかまったくないんだからね。

うん……。

寒い晩は家うちに来て眠ればいいよ、僕の部屋で。

ええ……。

フフフ……母さんも君のこと娘むすめみたいだつてさ……。

書いてあったのね、手紙に。

書いてあったよ。

うん……。

（ハタと）それで？

カーヤ え？

ラバン 夢の続き。途中だよまだ。ヴィツェックが緑色の独楽を回して、皆が夢中になって、僕も夢中で、ブルト先生がやってきた。

このあたりまでに、カーヤの席とラバンの席はかなり離れた位置関係になっている。

カーヤ ああ……。独楽は見たことのないような速さで回り続けているの……。見ていた人達の顔

から笑顔が消えていったわ……。きつと独楽が恐ろしく思えてきたからよ……。だけど、それでも誰一人独楽から目を離さない……。その時よ……。風に攫さらわれたのかしら、あなたが空中に浮かび始めたの。

ラバン え……。

カーヤの表情も、何か恐ろしいことを語っているかのように硬直していて――。

カーヤ だけどあなたは独楽を見つめたままなの……。気づいてないんだわ、自分がどんどん地面から離れて空に向かっていってること……。あたしは叫んだわ、「助けて！ みんな！ ラバンが！ ねえみんな！」。

不意に列車が急停車した。

カーヤ なに!?! どうしたの!?

ラバン 次の駅に着いたんだ。(と立ち上がる)

カーヤ (急速に心細くなつて) どこ行くの……!?

ラバン 何か食べる物を買ってくるよ。

カーヤ 待つて。行かないで。

ラバン すぐ戻るよ。

カーヤ ラバン……!!

ラバン、去っていつてしまった。

カーヤ
ラバン!

カーヤの近くにいた乗客(乗客1・女性)が鳴咽おえうし始める。

カーヤ、不審に思つてそちらを見るが、周囲の客は気にも留めぬ様子で、能面のごとき表情をしたまま押し黙っている。

カーヤ (ので、乗客1に)……どうされました……? (遠慮がちに)大丈夫ですか……??

乗客2・女性 (以下、小さな声で、乗客3に)それからどうなったのかしら。

カーヤ ? (と見る)

乗客2 同級生たちは気づいたのかしら? 彼が空に向かって浮かんでいってしまったことに。

乗客3・女性 気づきましたよ。一人の男の子が声をあげたんですよ。「大変だ、ラバンが飛んでるよ!」。

カーヤ !?

乗客4・男性がなんだか悲痛な表情でリンゴを齧る。その音が過剰に大きく響く。

カーヤ !?

乗客5・男性 (乗客3に) それでラバンもようやく自分が浮かんでいることに気づいたんですね。

乗客3 そう。まだその時は、彼の目にはしっかりと見えてたはずですよ。ですから、同級生たちの差し出した手が。大声でわめいて開いた口が。

カーヤ (思わず腰を上げ) 私の夢です。

乗客たちが一斉に、こわばった表情でカーヤの方を向く。

乗客3 (恐れるようでもあり咎めるようでもある目で、カーヤに) なんですか……!?

カーヤ (気圧されつつも) 私の夢ですから……それ私がみた夢なんです……!!

乗客1 (突如、わっと泣く)

カーヤ 「!?……どうなさったんですか!?

すぐさま乗客4がリングを齧る。過剰な音。

乗客6・男性 (何かが我慢ならないかのように) ああ……!

カーヤ ……!

乗客2 (乗客3に) それで……!?

乗客3 同級生たちがこうやって手を高々と挙げて夢中で指をさしている。ラバンは空中で苦しそうにもんどり打っています。

カーヤ やめて……

乗客3 あちこちで「先生! 先生!」と呼ぶ声が出て、ブルト先生の隣にしゃがみ込んで独楽を見ていた校長先生が、眼鏡をずらすようにして振り返りました。生徒をかきわけて壁際まで行って手をかざすと、ちりのように小さくなったラバンに目を凝らします。やめてください……!

乗客3 枯葉色の空のぼやけた照り返しの中、校長先生の顔が蒼褪めました。そしてつぶやいた。「あいつの名前を名簿から削除しなくちゃな」。

大きな汽笛音と共に列車が走り出す。

カーヤ
！

窓の向こうの景色が歪んでいく。

カーヤ
ラバン！（誰にとんでもなく叫んで）止めてください！

乗客1
（嗚咽しながら）きつともう、あなたは彼には会えないわ……！

カーヤ
え……

いきなり乗客6・男性が声をあげて乗客1に抱きつく。乗客6はむしろ哀しそう、あるいは苦しそうな表情で、二人して床を転げまわる。

乗客4、5が連続してリングをむさぼるように齧る。

乗客6は乗客1に馬乗りになり、苦しそうに腰を動かしている。乗客1は抵抗するでもなく、嗚咽まじりに喘いでいる。

他の乗客たちは無言で目合う二人に近づき、ただ見つめている。

乗客2が抱いていた赤子がけたたましく泣き始める。

カーヤ
ラバン！（奥に向かって）止めてください！（と拳で窓ガラスをたたく）止めて！
ラ

バン！ 降ろして！

カーヤ、乗客の一人が床に落としていた杖を拾い上げると、それで窓ガラスを割る。
激しい音と映像効果。
そして大オーブニングへ――。

男1の声。ほどなく机に座ってパソコンを打っている彼の姿が見える。

男1

(打ちながら読みあげ) こうしてカーヤを乗せた列車は恋人を待たずに走り去った……。以上が、この度奇跡的にわが家で発見されました、かのフランツ・カフカ氏の未発表原稿の冒頭部分であります。小生のような文盲には到底理解し難い内容ではありますものの、芸術的、文化的価値の大きさ、その計り知れぬほどの大きさは、火を見るよりも明らかであることは、申し上げるまでもございません。つきましては、以前お送りしたお手紙に記しました通り、あらためて御相談いたしたく存じます。もしも貴殿の出版社からこの小説を出版していただくことになった場合……(考えて) 貴殿の出版社よりの出版を、当方が許可した場合……許可……(考えて) 許諾、許諾させていただくとした場合……、(考える)

少し前から男2の姿が見えている。

ノートの置かれた粗末なテーブルに座って、傍らにはジョッキのビール。スマホを見ながら大きなポウルに入ったチリをズルズルとすすっている。

男2 「いくらもらえますか」でいいじゃねえか。

男1 それは露骨すぎるよ。

男2 どうして。正直に書いた方がいいよ。「借金まみれで金が必要なんです」って。本当のことなんだから。だっておまえさんいくらもらえるのかが知りたくて書いてるんだろ？

男1 もちろんそうだけどね。それだけじゃないんだから。読み終わった？

男2 何を？

男1 何をじゃないよ。原稿。ノート。

男2 なんだよ原稿（つて）、ああ原稿か。これから読もうと思ってたところだよ。

男1 （男2の所へ行き）読まないなら返せよ、大事な原稿なんだから（とノートを見て）わ。なにこぼしてんだよシミだらけじゃないか！

男2 チリだよ。チリソース。

男1 気をつけて扱えつてあれほど言っただろおまえは！

男2 だからチリソースだって。おまえももう大人なんだからチリソースぐらいでクヨクヨするんじゃないよ。

男1 （かぶせて）どれだけの価値があるかわかってるのかこのノートに!? フランツ・カフカの未発表の小説の原稿だぞ！ 読んだことあるのかカフカ！

男2 ないよ。あるの？

男1 ないよ！ でもこれは読んだ。

男2 うん、あとあれだろ、先週図書館から借りてた、

男1 『すぐわかるカフカ入門』？

男2 『カフカ入門』、すぐわかる。

男1 読んでない。

男2 読めよ入門ぐらいはさ。借りたんだからさ。すぐわかるんだから。

男1 あの本な、カバーはずしたらな、『やさしい道の迷い方』だった。

男2 なんだその本。

男1 いたずらだろう誰かの。

男2 ひどいな。

男1 おかげで今朝もパン屋行った帰りにそのへんの道グルグルグル、

男2 読んだんだ『やさしい道の迷い方』。

男1 読むだろう。思わないからな、まさか違う本だなんて。

男2 読み終わるまで思わないか？

男1 ああもう！（とノートのシミを袖かどこかで拭いて）ああ広がっちゃった！

男2 馬鹿、駄目だよこすっちゃ。

男1 ……。

男2 読むよ。（とノートを奪い返し、開げる）

男1 読んでる間は食べるな……！（とパソコンの方に戻る）

男2 わかつてるよ。(とノートに目を落とし) あれ!?

男1 (ドキリとして) なに。

男2 (神妙に) 読めねえ。どうして読めねんだらう。

男1 眼鏡をかけてないからだよ。

男2 眼鏡だよ。眼鏡がないと読めませんよ私の場合、目はあっても。だから何かを読む時

にはまず目があるかどうかを確かめて、あ、あるなと思ったら次に眼鏡を……(と探すが無くて) どこだ眼鏡。

男1 (見ずに) 知らないよ。

男2 あ……。

男2、男1の目を気にしながら、チリの入ったポウルの中からそっとピシヨピシヨの眼鏡を取り出す。

男2 わ……。 (とポウルの上でチリの雫しずくを切り、一瞬どうしようか考えて原稿になすりつける)

男1 (気づいて) 何をやってるんだおまえは!

男2 拭くもの。

ドアが開き、女1(男1の妹)が封筒とバッグを手に帰宅してくる。

カーヤ ……。

車掌 どうかいからですよ……。

カーヤ ちゃんと行って聞かせればどくんです！ そうならそうと言ってくれればバルナバス

大尉がなだめてくれたのに！

誰を。

バルナバス

カーヤ (すでに嗚咽していて) 鹿をです！ 疲れた鹿は疲れていただけなんですから！

バルナバス 鹿をなだめるなんて考えは私にはありません。

カーヤ (その物言いがシヨックで) ……。

バルナバス 轢いてしまったものはしょうがない。ほら、涙を拭きなさい。(車掌に) 申し訳ない。

まだ子供なんです。

カーヤ ……。

車掌が戻ろうとした時、隣の車両からクラムが来る。

クラム (車掌に苦言を呈するように) 一体なんなのですかあの母娘は。

(察して) ああ……この列車に居着いてしまったんです……。

クラム 居着いた？ 居着いたというのは――

車掌 仕方なく、皆大目に見てやってるんですよ……。

クラム 住んでるんですかこの列車に。

バルナバス　　クラム中尉、何を騒いでいる。

クラム　　今便所に行ったら……（泣いているカーヤに気づき、少し嬉しそうに）……え、泣かせたのですかついに。

バルナバス　　泣かせてなどいない。ついにつてなんだ。

クラム　　（それには答えず）先ほどから震えが止まらないのです……なんだか体が宙に浮いているような気がして……。

カーヤ　　え……。

バルナバス　　風邪でもひいたんだろう。じきに着くぞ。（窓の外を指し、カーヤに）ごらんなさい……あの山の向こうで光ってるの、あれ閃光弾ですよ。

クラムはなぜか座らずに立っている。車掌は去っており、隣の車両から、妊婦の娘（レニ）を連れた母親（オルガ）が、幽霊のように静かに現れる。

クラム　　来やがった……。

オルガ　　（クラムに）どうしてお逃げになるのかしらと思ったら、そうですか、（娘に）ごらん、女を連れてるよ。

クラム　　この人は違う。

オルガ　　（バルナバスに）御苦勞様です……。 （娘に）ほらレニ。

レニ　　御苦勞様です……。

クラム 戻れ！ 戻らんとひどいぞ！（バルナバスに）敵兵の女房と母親です。

バルナバス 敵兵の……？

オルガ （クラムに）違う？ 違うというの？

クラム この方は単なる同行者だ。

バルナバス ベラベラしゃべ喋らんではない！

オルガ （クラムに）お逃げにならず責任をとってくださいませ……御親切にあなたはこの子の背中をさすってくださいました……。ただ、丁度あたしの見えないうところで何をしたかはわかりやしません……。

レニ そうよママ、この方レニにいろんなことをしたわ……。

クラム 嘘をつけ。おまえが便所に隠れていたんじゃないか。（バルナバスに）いきなり俺のあちこちをベロベロ舐め回しやがって……！

レニ （驚いたように、しかし笑顔で）何をおっしゃるの。あなたが言ったんだわ「おまえの

ベロを見せてみる」って。（カーヤを見る）

カーヤ （顔をそむけ）……。

クラム どの口が言う……。

バルナバス なんだたかりか。向こうに行け。

クラム 母親になる人間が。おぞましい。

オルガ おぞましいのはあなたの方です。責任をおとりなさい……ええ、お腹の子の父親は

とつくにあなた方に殺されてしまったことでしょうよ！

カ
フ
カ
ズ
・
デ
ィ
ツ
ク

主要登場人物

- フランツ・カフカ
マックス・ブロート：フランツの親友
フェリーツェ：フランツの一番目の恋人
ミレナ：フランツの二番目の恋人
ドーラ：フランツの最後の恋人
オットラ：フランツの妹（三女）
ヴァリ：フランツの妹（次女）
エリ：フランツの妹（長女）
ゲオルク：ブロート邸の執事
ゼリグ：保険局員
ポラック：ミレナの夫
ユーリエ：人形をなくした少女
ユーリエの父／謎の男
医者／裁判長
男1・2／編集者A・B
入院患者
大家、夫・妻
酔っ払い、夫・妻
- ゼリグの部下
おじき
掃除婦
似顔絵描き
神父／出版社の社長

ブラハ——そこは今なお、遠く中世にまで根を張った町であり、子供の成長の舞台としてはかなり無気味な世界である。

そこでは伝説や秘密が、石壁に溶け込んでいる。お使いに出された子供は、復讐の念に燃える過去が待ち伏せる穹形の門や、異様に曲がりくねった小路を通り抜けていった。ここがフランツ・カフカの、短く、奇妙な人生の舞台だった。

※ ※ ※

舞台上は抽象的な美術セットに埋めつくされ、必要に応じて、そこは彼が住んだブラハの町にもなれば、彼が暮らした部屋にもなるだろう。トンネルのような控えの間と、陰気な家具のある居間を抜けた先の狭い部屋。簡素なベッドと戸棚が一つ。ランプと、古ぼけた書き物机。

あるいは、彼が勤めた半官半民の役所に見える時もあるはずだ。正確にいうと「ボヘミア王国労働者災害保険局法規課」。重厚な建物の三階。びっしりと並んだ書類棚。饅頭のような煙草の煙と埃の臭い。

はたまた、彼が息をひきとった、キアリングの療養所。もっとも安く、もっとも質素な、小さなサナトリウム。そしてなによりも、そこは、彼が書いた不可解な小説世界だ

—。

※ ※ ※

客電が落ちるとともに静かに音楽が流れ始め、暗闇くらやみの中に次のような字幕が浮かぶ。極めて質素に。

『フランツ・カフカは「城」「審判」「変身」等、謎めいた小説を書き続け、』

『一九二四年、四十一歳の誕生日を目前にして他界した。』

『その作品のほとんどは彼の死後に発表されたものであり』

『生前、労働者災害保険局の局員だった彼を作家とみなした人間は、ごくごく少数だった。』

字幕、静かに消えた。

ぼんやりと明かりが入ると、フロック・コートにシルクハットをかぶり、原稿を手にした二人の男とマックス・ブロートが浮かび上がった。

おきて
錠の門の前に門番が立っていた。

男1
男2
そこへ田舎から一人の男がやってきて、

ブロート
(田舎から来た男の声色こゝろいしで) 入れてくれ。

男1
と言った。

ブロート (門番の声色で) 今は駄目だ。

男2 と門番は言った。

ブロート (田舎から来た男の声色で) 今が駄目でもあとならいいのか。(門番の声色で) ともかく

今は駄目だ。

男1 男は、何年も門の前で待ち続けた。

男2 そのうち、なんだか子供っぽくなってきた。

男1 永らく門番を見つめてきたので、彼が纏まとっている毛皮のマントに止まったノミにもすぐ気づく。

すると、ノミにまで、

ブロート (田舎から来た男の声色で) お願いだ。中へ入れてくれないか。

と頼んだりした。

男1 そのうち、視力が弱ってきた。

男2 あたりが暗くなったのか、それとも目のせいなのか、わからない。

男1・2 命が尽きかけていた。

いつの間にか別のエリアに散在する、フェリーツエ、ミレナ、ドーラ、オットラ。カフカの人生を彩った女性達。

フェリーツエ

死の間際、これまでのあらゆることが凝結してひとつの問いとなった。

ミレナ

ドーラ

オットラ

ブロート

女達

ブロート

これまでついぞ口にしたことのない問いだった。体の硬直が始まっていた。もう起き上がれない。

すっかり縮んでしまった男の上に、大男の門番がかがみ込んだ。

(門番の声色で) 欲の深い奴だ。これ以上何が知りたい。

男は言った。

(男の声色で) 誰もが掟を求めているのに、この永い年月の間、どうして私以外の誰一人、中に入れてくれと言ってこなかったのでしょうか？

命の火が消えかけていた。

男2

男1

ブロート

うすれていく意識を呼び戻すかのように、門番が言った。

(門番の声色で) 他の誰一人、ここには入れない……なぜならこの門は、おまえ一人のためのものだったからだ……さあ、もう俺は行く……ここを閉めるぞ……。

女達はいつの間にか消えており、男1、2はそれぞれ編集者A、Bになった。

そこはフランツ・カフカの親友、マックス・ブロートの住む家のリビングだ。

ブロート

(男二人に) どうですか？

編集者A・B

(原稿から目を上げて) ……。

ブロート

あの、

編集者A

いいと思いますよ。

編集者 B

ええ、いいですよ。

プロット

本当にそう思われますか。

編集者 A

嘘うそをついていると？

編集者 B

我々が？

プロット

あ、いえ、とんでもない、そうではないんです。ただ、彼の書く小説は御覧の通り、いささか風変わりと申しますか、難解と申しますか、誰もが楽しめるというものではない。ですが……確かに非現実的な表現ではありますが、こうした方法でしかとらえられない世界というものがね、ありますよね。

編集者 A、B、聞いているんだかないんだか。

編集者 B

わかります。

プロット

そうですか。よかった。

編集者 A

いいとは思うんですよ、ちょっと手を加えれば。

プロット

は？

編集者 B

そうですね。

プロット

手を加える？

編集者 A

(さか遮って) これ、こいつ、入っちゃった方がいいでしょう門の中に。

編集者 B

ですね。

プロット

……え？

編集者A

男。だからね、永い間待った甲斐^{かひ}あってようやく入れるんですよ。

編集者B

(同意して) ええ、ええ、「ああよかったね」っていう。

プロット

いや、入っちゃっちゃ、

編集者A

(遮って) めでたしめでたしだ。

プロット

駄目ですよ入っちゃ。そういう話じゃないんですよ。

編集者A・B

(きよんととしてプロットを見ている)

プロット

(ので) そういう話じゃないんです。

編集者A

じゃあ何か出てきましょう、城の中から。

プロット

何が？

編集者A

(一瞬考えて) お姫様？

編集者B

ああ。

編集者A

永い間待った甲斐あって、美しいお姫様と結婚するんです。

編集者B

ああ、ね。

プロット

ですからこの物語は、待っててよかったねっていう話じゃないんですよ。

編集者A・B

わかってますよ。

編集者B

あ、じゃあこうしたらどうですかね。

編集者A

何？

編集者B

男と門番っていう設定を、「男と気のいい木こり」に変えてみるんです。

編集者 A

なるほどな。

プロット

門の前ですよ。掟の門。

編集者 A

(編集者 B に) いっそのこと、「羽にケガをした白鳥と気のいい木こり」にしてみた

ら？

編集者 B

それだ。

プロット

それじゃあ全然違う話になっちゃうでしょう！

編集者 A

(低いトーンで) プロット先生。彼がこれまで出版した六冊の単行本の中で一番売れた

のはあれですよ。あの、虫になっちゃう、

プロット

『変身』ですね。

編集者 A

売れ行きは……？

プロット

……御存知でしょう。

編集者 A

何部売れました……？

プロット

初刷しよすりが……千二百。

編集者 A

初刷しかないでしょう。

編集者 B

処女作に到っては八百部刷って三百しかはけてない。同人誌並みです。

プロット

あれは出版社に、(言い直し) 出版社にも問題があったんです。潰つぶれた会社の悪口は

言いたくありませんが、なにしろ杜撰ずさんなところで。最初、表紙の著者名がフランツ・

フカフカになってたんですよ、フカフカ！ 普通間違えますか!? 表紙ですよ！

編集者 A

プロット先生、今さら申し上げるまでもないでしょうけど、本が一冊売れると定価の

30%もしくは40%を書店と問屋に取られます。著者に10%。残りの50%もしくは60%を出版社が頂くわけですが、そこから本の制作費、つまり紙代、印刷代、製本代、デザイン代、それから宣伝費、倉庫代、返本手数料、運営費、人件費を捻出しなくてはなりません。先生がお書きになっている御本のように二万、三万売ればまず問題ない。私共も大変助かっております。しかし、千や二千しか売れないんじゃ担当者に入件費も払えない。あげく、別の本の担当者が片手間で受けもつ、フカフカでも仕方ありません。

プロット

わかっているよそんなことは！ 私はあなた方が秀れた作品ならば売れなくても出すつて言ってくれたから、だったら、

編集者B

秀れた作品ならばですよ。先生の作品みたいに。

編集者A

先生の御本ほどは売れなくてもと申し上げたんです。

プロット

彼の小説に比べれば私の作品なんか屁だよ。

編集者B

屁!?

編集者A

それじゃあ私共は屁を売ってるんですか？

プロット

(半ばヤケクソで) ああ、屁を売ってんだあんたらは。屁売り商だ。(放屁をマイムで) プッププー。

編集者B

なんて低レベルな。

編集者A

わかりませんね。どうして先生のような才人が、なにさんでしたっけ。

編集者B

カフカ。

編集者 A

カフカさんみたいな（言葉を探して）特殊な作家を応援されるのか。

ブロート

（まだやっていて）プツプー。

編集者 A

失礼しよう。

ブロート

（帰れとばかりに）プー。

編集者 B

お邪魔しました。

ブロート

プースカプツプツプー。

編集者 A、B、去った。

その間もブロート、プープーやっていたが、次第に語気、弱くなる。

ブロート

（表情は最早^{もはや}シリアスで）……プツプー……。

見れば、ブロート邸の使用者であるゲオルグが立っていた。

ブロート

！

ゲオルク

（こともなげに）もうよろしいでしょうか。

ブロート

（気まずさありつつ）なんだ。

ゲオルク

ですからプープーやるのは、もうお済みでしょうか。

ブロート

（それは無視して）フランツに電報を打ってくれ。

ゲオルク 電報ですか。

ブロート ああ。「クルト・ヴァルフ書房NG」それでわかる。

ゲオルク フランツ・カフカ様ですよね。

ブロート そうだよ。

ゲオルク よろしいんですかね。

ブロート (苛々と) 何が。キーアリング大通り七一番地。

ゲオルク キーアリング・サナトリウム。

ブロート そう。どうしたんだ早く！ ……いや……そう急ぐことでもないかもしれない……。

ゲオルク よろしいんでしょうか。

ブロート 何が。

ゲオルク 電報。

ブロート 事實は事實だよ。嘘言っただけか喜びさせたところでなんになる。

ゲオルク いや、そうではなくて、

ブロート 少し放つといってくれないか！

ゲオルク はあ……。

ブロート、力なく机につつぶした。

ゲオルクは何故か釈然としない様子で去っていく。

ゲオルクとすれ違うようにして、キーアリングの療養所にいるはずのフランツ・カフカ

がバジヤマ姿で現れるので、彼がプロットのイメージであるらしいことが察せられる。

フランツ

だから言ったらろ……あんな奴らに俺の小説がわかるわけないんだよ……。

プロット

(つぶしたまま) あいつらにわからなくても、ともかく出版させちまえばこっちの勝ちだと思っただが……すまない。

フランツ

なんで謝る。むしろ有り難いくらいだよ……。『掟の門』はともかく、あとはおおむね駄目だ。俺が死んだあとに作品だけが残って人様の目に触れ続けるなんて、とてもじゃないが耐えられないよ。

プロット

またそういう……(強く) もっと自信をもてて！

フランツ

自分で納得いってないものにどうやって自信をもつんだよ。

プロット

じゃあ俺のやっていることはなんなんだって話だろ。え!? 二冊目の単行本の時だつてそうだよ。小さいながら広告も出ました、校正も終わりました、さああとは書店に並ぶだけですって時に、おまえ俺に無断で出版社宛になんて手紙書いた？

フランツ

あれは悪かったよ。

プロット

(構わず続けて)「私は何度も、自分の責任感をまっとうするか、それとも美しい書物に混じって一冊の本を持ちたいという欲望を満たすか、迷っております」

フランツ

悪かったって。

プロット

「たった今、決心がついたところです。やはり私の小説は人目に触れるべきものではありません」

フランツ
もういいよ。

ブロート 「この期じに及んでではありますが、やはり出版は差し控えさせて頂きたいと思います」
フランツ (他人事たにんごとのように) まあいいじゃないか、結局は出たんだからさ。元氣出して。

ブロート おまえの本だろう！

フランツ できるだけ考えないようにしてるんだよあの本のことは……あの本に限らないけど

……。

ブロート ……！ 俺なんか、俺なんか新しいのが出る度たびに本屋行って、なるべく売れてそうなる本の上にこうやってそおつと置いてやってんだぞ！

フランツ やめてくれよ、そういうの。

ブロート (指さして) 『ファックション通信』、『月間ニューモード』、フランツ・カフカ『変身』。

フランツ 不自然だろそれ。

ブロート 『三国志』一巻、フランツ・カフカ『変身』、『三国志』三巻、フランツ・カフカ『変身』。

フランツ 売れないよ、そんなことしたって。

ブロート ……。

フランツ 有り難いけどな……。売れない。

ブロート ……なあ……。イライラするんだよ……。！

フランツ 何が。

ブロート おまえ見ると……。もどかしくて！

フランツ 雀がボトリと地面に落ちる。

オットラ 柩はまだ揺れている。

フランツ ガタガタ……ガタガタ……。

フランツ・オットラ ガタガタ……。

ヴァリ 会社遅刻するよ。

その言葉をきっかけに時間が停止し、フランツ以外の三人はまるでオブジェのようにこおりついた。同時に、プロートが、冒頭にも登場したあの編集者二人と共に現れ、オブジェ化した人々や傍観するフランツのいるエリアに入ってくる。

プロート・フランツ 何を嗅ぎつけたのか、あるいは何か不安を覚えてか、警官がおずおずと近づい

てくる。と、その時、柩のフタが勢いよくはじけとんで、一斉に短い叫び声が起こる。棺にしっかりと押し込まれていたものが、

編集者A (遮って) プロート先生。

プロート (見た)

編集者A (きっぱりと) もう結構です。有り難うございました。

プロート 最後まで聞いてみてくださいよ。

編集者A 他をあたってください。行こう。

編集者B 失礼いたしました。

二人、歩き出した。

ブローツ 待てよ……。

編集者A・B

ブローツ (懇願して) 頼む。本にしてくれ。

編集者A できません。

ブローツ どうして！ 確かに今すぐは売れないかもしれない。だけど、十年後二十年後、ある

いは百年後二百年後に。

編集者B ブローツ先生は、二百五十歳まで生きるおつもりですか？

ブローツ 俺は死んでいるよ！ だけど文学は生き残る。

編集者A 先生、悪いことは言わない。御自分の本のことを、ご自分の生活のことを考えた方が

いい。先生の本は面白い。もっと面白くなるはずです。

フランツ 低俗だよおまえの本は。

ブローツ ! (フランツはブローツにしか見えない)

編集者B もっともつとわかりやすく書かれたらいいかですかねえ。そうすればもつと売れる。

ブローツ 俺の本のことはいい。

編集者A よくないでしょう。まず御自分の本を売らないと。あの、誰でしたっけ、

編集者B・フランツ カフカ。

知ってるぞ……フランツ・カフカはいた……！ フランツ・カフカはいたんだ……！
俺は知ってるよ……！ フランツ・カフカはいた……！

オットラ、戻ってきていた。

オットラ そんなの誰だって同じじゃわ。

ブロート ……なに……!?

オットラ 兄さんに限らない。人間はみんないつか忘れられていくのよ。

ブロート フランツ・カフカだぞ……。

オットラ 自分だけがあの人をわかってるようなこと言わないで。

ブロート なんだと……。

ドーラ (オットラを制して) オットラさん。

ブロート (ボソリと) おまえだな……。

ドーラ ……え!?

ブロート おまえが隠したんだな……！

オットラ ……違うわ！

ブロート 返せ！

オットラ 隠してなんか、

ブロート (遮り、大声で) 嘘つくな！ 返せ！

ブロート、周囲の者が止める間もなくオットラに掴みかかった。
悲鳴。

ドーラ やめて！

ブロート 返せ！

ドーラ やめてよ！

ブロート、もみあつたあげく、引き離され、尻もちをついた。
しばしの静寂——。

酔っ払い・妻 やっぱり失礼しましょうか。

ブロート 帰るな！

酔っ払い・妻 (間髪入れずに) もうちよつといきましょう。ね。

オットラ、奥へ去る。

ドーラ オットラさん。

オットラ(声) 平気です。ごめんなさい。

ケラリーノ・サンドロヴィッチ

劇作家、演出家、映画監督、音楽家。1963年1月3日生まれ。

82年、ニューウェイヴバンド「有頂天」を結成。また自主レーベルであるナゴムレコードを立ち上げ、数多くのバンドのアルバムをプロデュースする。85年、劇団健康を旗揚げ、演劇活動を開始。92年解散、93年にナイロン100℃を始動。99年、『フローズン・ビーチ』で第43回岸田國士戯曲賞を受賞し、現在同賞の選考委員を務める。2018年秋の紫綬褒章を始め、第66回芸術選奨文部科学大臣賞、第24回読売演劇大賞最優秀演出家賞、第26回読売演劇大賞最優秀作品賞（ナイロン100℃『百年の秘密』）など受賞多数。音楽活動では、有頂天、ケラ&ザ・シンセサイザーズ、鈴木慶一とのユニット No Lie-Sense など各種ユニット、ソロによるライブ活動や新譜リリースを精力的に展開中。

●この作品を上演する場合は、必ず、上演を決定する前に下記メールアドレスまでご連絡下さい

上演許可申請先：株式会社キューブ

E-mail webmaster@cubeinc.co.jp

TEL 03-5485-2252（平日 12時～18時）

ドクター・ホフマンのサナトリウム～カフカ第4の長編～

2019年12月1日 初版第1刷印刷

2019年12月10日 初版第1刷発行

著 者 ケラリーノ・サンドロヴィッチ

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03(3264)5254 振替口座 00160-1-155266

装丁 榎本太郎

組版 フレックスアート

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1889-4 ©2019 Keralino Sandorovich, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします